

小学校教員養成課程を主体とする私立大学教育学部における 音楽免許取得者の特徴

深谷 和義, 小杉 裕子 (椋山女学園大学)

小学校教員養成を主体としている私立大学教育学部において、入学後の希望により、中高音楽免許を取得する学生の特徴を、入試区分と教員就職状況を中心に調査・分析する。その結果、音楽実技を含む入試区分を入れたことで、音楽免許取得の希望者が増えた可能性があること、前期入試での入学者に小学校教員になる学生が多いこと、音楽実技入試で入学した学生や大学での GPA が高い学生が小中学校音楽教員に多く合格していること等がわかった。また、小学校免許に加えて音楽免許を取得したことに対して、卒業生の多くが多様な観点でよかったと感じていることがわかった。

キーワード：音楽免許、小学校教員養成、教員就職、教育学部、私立大学

1 はじめに

2020 年 4 月 1 日現在において、中学校・高等学校教員「音楽」の教員の免許資格を取得することができる大学は、国立 49、公立 3、私立 41 の計 93 大学ある（文部科学省, 2021）。これらの大学における学部名称は、おおそ音楽学部（芸術学部等を含む）か教育学部（学校教育学部等を含む）のいずれかである。前述の 93 大学中で、音楽学部が 34 大学、教育学部が 59 大学ある。

音楽学部においては、取得可能な教員免許は音楽のみであることが多い。学部としては、教員養成に特化しているわけではなく、中には本格的に演奏家を目指す学生もおり、音楽教育というよりも音楽が好きだったり音楽活動に興味を持っていたりして入学する学生が多い（磯部ほか, 2010）。したがって、教員免許取得者は入学者の一部となる。

それに対して、音楽教員免許取得可能な教育学部では、音楽だけでなく小学校の教員免許取得可能な大学が多い。音楽を含めて入学定員を学校教育教員養成課程国語教育コース、音楽教育コースのように教科ごとに分けて定めているか、あるいは、入学定員は教育学部一括で、入学後に本人の希望や適性により音楽等の教科の中学や高等学校の教員免許を取得できる大学もある。後者の場合、小学校教員免許が主体で、加えて音楽等の免許を取得することになる。なお、教育学部ではほとんどの入学者が何らかの教員免許を取得する。

入学定員を教科で分けて入試を実施している大学では、国語、数学、理科、社会、英語等、通常的一般選抜で扱われる教科と比べて、音楽のような実技系教科の入試難易度は比較的低いことが多い。例えば、河合塾（2021）の 2022 年度入試難易予想ランキングでは、ある国立の教員養成課程の小学校教員免許を取得可能

な教科ごとの偏差値で、国語・社会・英語 52.5、数学・生活 50.0、理科 47.5 となっており、音楽はこれら 6 教科の中で一番低い理科と同じ 47.5 であり、共通テスト得点率では理科の 63%よりも低い 59%とされている。

入試区分と教員就職状況との関係を調査した研究では、竹内（2019）が小学校の教員養成を目的としている私立大学の学部における教員就職希望者を対象に、教員採用試験の合格率が入試区分とは関連しないことを示している。音楽専攻大学生に関しては、磯部ほか（2010）が教育系を含む音楽専攻学生の進学理由、適応感、卒業後の進路希望等の特徴を調査した研究がある。

規模があまり大きくない私立大学教育学部のいくつかは入学定員を教育学部一括としており、その学部では、小学校免許取得が主体で、加えて一部の学生のみ何らかの中高免許を取得する場合がある。そのような学部においては、中高免許取得希望者の入学希望者数や教員就職状況が学部全体の入学人数に影響を及ぼす。そこで、小学校の教員養成を目的としている大学において、人数が少ないながらも中高免許を希望する学生の状況を明らかにする意義がある。

本研究では、そのような教育学部において、卒業時に中高音楽免許を取得する学生（以下、音楽コースの学生）の教員就職状況等の特徴や音楽コースの卒業生が音楽免許取得に対してどの程度よかったと感じているかを扱う。中高免許のうち音楽を取りあげるのは、音楽が実技を伴う教科のため、大学での学びや教員としての職務が小学校や中高国語、数学とは異なる特徴がある可能性が考えられるからである。

2 調査対象学部の状況と入試区分

2.1 調査対象学部の概要

本研究における調査対象は、中規模私立女子大学 A 大学の教育学部である。2021 年 5 月 1 日現在で、大学の収容定員 5,464 名、教育学部の収容定員 692 名となっている。

対象学部は 2007 年度に設置され、保育士・幼稚園教員養成を主とする「保育・初等教育専修」と小中学校教員養成を主とする「初等中等教育専修」とに分かれている。専修ごとの入学定員は保育・初等教育専修 90 名、初等中等教育専修 80 名で、学部全体では 170 名である。その他に 2 年次あるいは 3 年次編入学試験等での若干名の入学定員がある³⁾。ただし、2011 年度入学者まで初等中等教育専修は 67 名、2016 年度入学者まで保育・初等教育専修は 80 名の入学定員であった。本研究で扱う音楽免許取得は初等中等教育専修のみで可能であるため、以下においては対象学部と記載した場合に、初等中等教育専修のみを扱う。

対象学部においては、小学校教員免許取得が必須となっている。それ以外に、本人の希望で幼稚園教員免許、中高数学教員免許、中高音楽教員免許が取得できるプログラムを 2 年次から選べる⁴⁾。80 名の入学定員すべての入学者に対して上限を定めずに幼稚園、数学あるいは音楽の免許取得が可能となっていることが大きな特色である。

2.2 入試区分

対象学部の入学試験には、2021 年度入試においては、学校推薦型選抜として「併設校制推薦入試 (20)」⁵⁾「指定校制推薦入試 (19)」の他に、併願可の「音楽実技特別推薦入試 (1)」があり、一般選抜として「一般入試 A (28)」「一般入試 B (5)」「大学入学共通テスト利用入試 A (4)」「大学入学共通テスト利用入試 B (2)」がある⁶⁾。また、受験者はほとんどいないが、その他として「社会人入学特別選抜 (1)」がある。それぞれの () 内には各入学試験の募集人数を記載している。なお、音楽実技特別推薦入試は 2015 年度入学者から指定校制推薦入試の募集人数を 1 名減らして実施されている。これは、音楽実技を含めた推薦入試であるが、あくまでも対象学部での入学定員の一つであり、入学後の音楽免許取得が必須ではない⁷⁾。

3 音楽コースの学生

3.1 入学年度ごとの学生数

対象学部における音楽コース学生の人数の状況を

明らかにする。各入学年度での学生数を入試区分ごとに分けて図 1 に示す。学生数は、2017 年度入学者までは卒業時に中学校または高等学校音楽免許を取得した卒業生の数、2018 年度以降は音楽免許取得見込み数の計 249 名である。年度ごとに全体の人数を記載している。図 1 において、学校推薦型選抜を除いて、「一般入試 A」と「大学入学共通テスト利用入試 A」は合わせて「前期入試」、「一般入試 B」と「大学入学共通テスト利用入試 B」は合わせて「後期入試」とし、その他の編入学試験等は合わせて「その他」としている。これは、以下においても同様である。

2.1 節で述べたように、音楽コースでの定員を定めていないため、年度によって大きく人数が異なる。当初は 20 名強であったが、2012 年度からは徐々に減少傾向にあった。その対策の一つとして、2015 年度からは音楽実技特別推薦を実施している。募集人数は 1 名のみであるが、多い年度には 4 名の入学者があり、また、音楽実技特別推薦で不合格になった受験生が一般選抜での受験で合格して入学するなど、対象学部での音楽コースの人数が増加傾向に転じている。特に、2019 年度からは学部設置当初と同様に 20 名以上である。加えて、対象学部全体の指定校制推薦での受験者が 2012 年度入学者以降募集人数を下回っていることが多いため、学校推薦型選抜での入学者の不足を補うことにもなっている。音楽実技での入試があることをきっかけに、対象学部において音楽免許が取得できることを初めて知ったという声が入学者や高校の進路担当教員から大学教職員に入ることがある。高校教員および高校生に対して、音楽免許取得が可能な学部だという認識がより得られることに結びついた可能性がある。

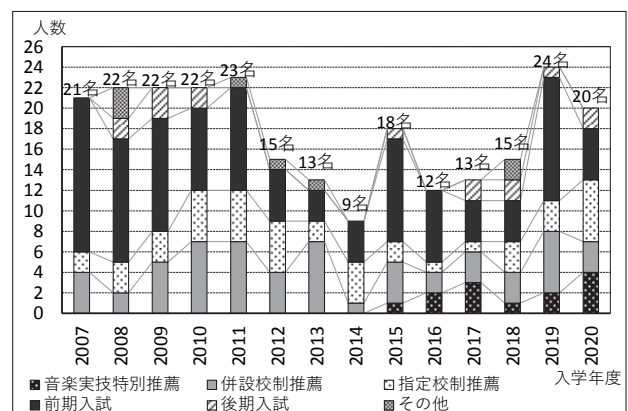


図 1 入学年度ごとの学生数

3.2 入試区分ごとの受験時評定値

音楽コース学生の入学前の学力を評価するため、受験時評定値の特徴を明らかにする。各入学年度での受験時評定値を入試区分ごとで平均して図2に示す。

「その他」の区分の学生は人数が合計8名で少ないことと評定値が不明な入学生がいるため、これ以降を含めて区分別の結果では扱わないこととする。

図2より、年度によって多少のばらつきは、どの入試区分においてもみられるが全体的に大きな変動がないことがわかる。すべての年度における平均値では、入試区分ごとに「音楽実技特別推薦」3.89、「併設校制推薦」3.87、「指定校制推薦」3.97、「前期入試」3.52、「後期入試」3.50 となっており、学校推薦型選抜の方が一般選抜よりも高くなっている。ただし、評定値は高等学校ごとでの学力差があることから、学校によって一律に比較できないことが一般的である。井上(2014)は高校教員への調査により、大学進学希望者の割合が高い高校ほど、推薦入試の利用を広くは推奨していないことを明らかにしている。大学進学率が高い高校は偏差値が高いと考えられる。したがって、学校推薦型選抜での入学を希望する高校生の傾向としては、偏差値が比較的高くない高校からの入学者が多く、その中で評定値が高い入学者が多い可能性が考えられる。

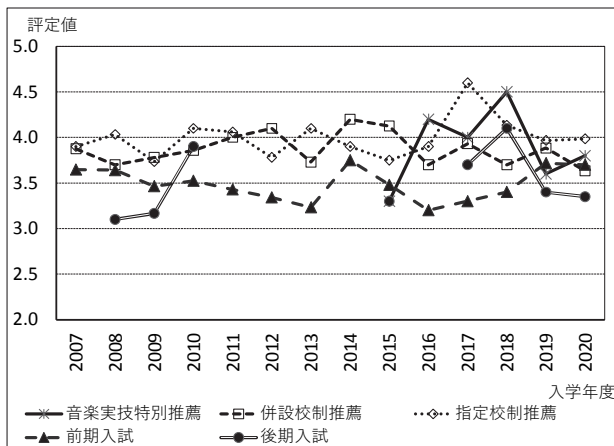


図2 入試区分ごとの評定値

3.3 入試区分ごとの大学での GPA

音楽コース学生の大学における学力を評価するため、各入学年度で大学での GPA を入試区分ごとに平均して図3に示す⁶⁾。ここで2007年度入学者に関しては、大学として GPA を調査していなかったため扱わない。

図3より、受験時評定値と同様に年度によっていず

れの入試区分も多少のばらつきがある。入試区分ごとの平均値では、「音楽実技特別推薦」2.81、「併設校制推薦」2.82、「指定校制推薦」2.90、「前期入試」2.81、「後期入試」2.76 となっており、受験時評定値ほど大きな傾向の違いはみられないことがわかる。

学校推薦型選抜で入学する学生は一般選抜での入学者と比べて学力が低いという先行研究がいくつかある(例えば、石井, 2014; 小松, 2011)。しかし、対象学部の音楽コースの学生においては、石井(2012)の調査結果と同様にその傾向はない。音楽コースの学校推薦型選抜での入学者は、受験の段階から大学・学部等を絞って受験していることから意欲が高く、実技が多い音楽免許に関わる科目でよい成績をあげていることがその理由として考えられる。

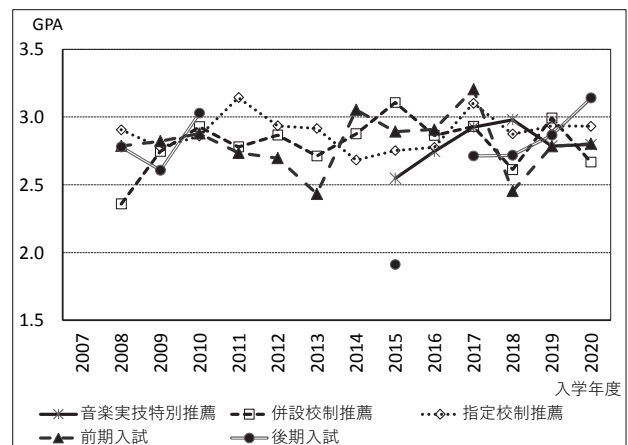


図3 入試区分ごとの GPA

3.4 入試区分ごとの評定値と GPA との関係

大学での学びの成果の詳細を評価するために、音楽コース一人ひとりにおける受験時評定値と大学での GPA との関係を図4(a)~(e)に示す。ここでも、2007年度入学者に関しては扱っていない。なお、いずれの入試区分においても評定値そのものを選抜には用いていない。ただし、学校推薦型選抜においては、それぞれ受験資格として最低評定値を定めている。そこで、以下での分析において選抜効果(平野, 1993)は必ずしも大きくないと仮定する。

図4より、まず、(a)音楽実技特別推薦では、相関係数が0.803でかなり強い相関がある。また、(b)併設校制推薦、(c)指定校制推薦の相関係数がそれぞれ0.630、0.637でやや相関がある。日下田・福島(2019)は、指定校推薦入試での入学生の評定平均値で大学入学後の成績をある程度予測できることを示

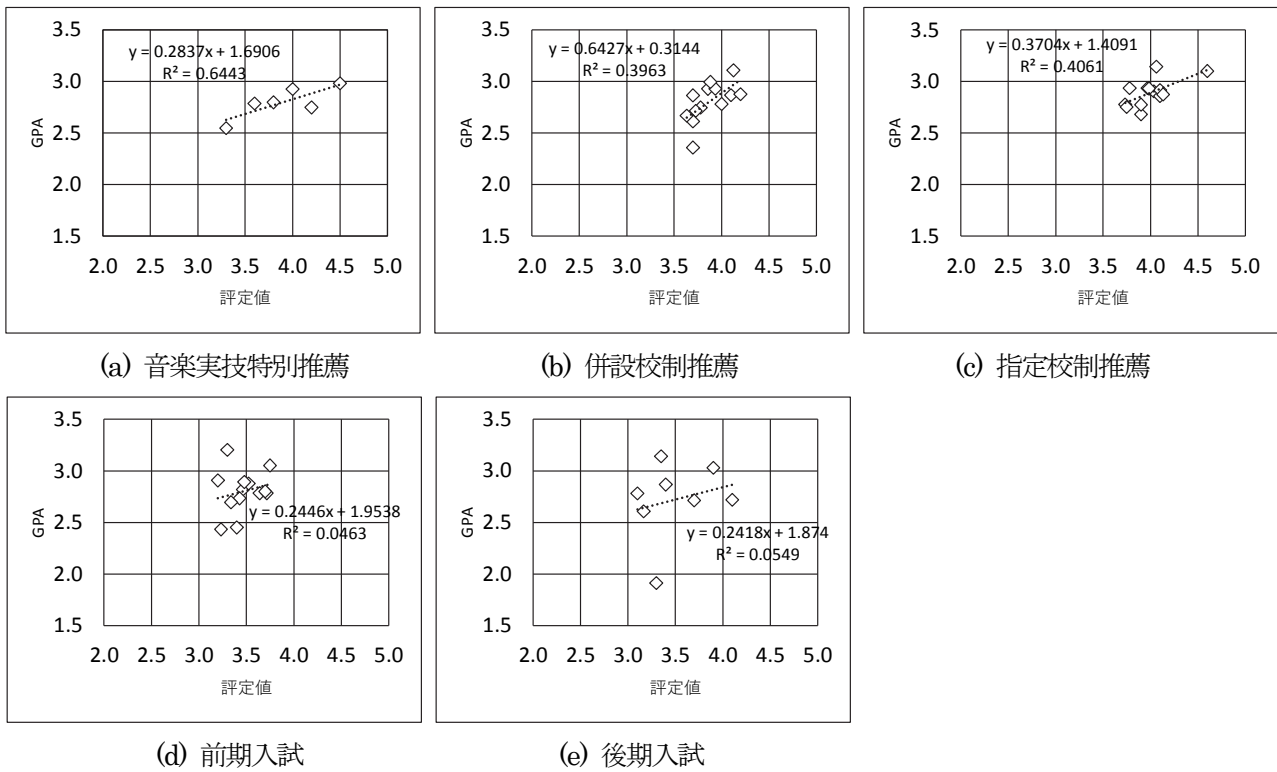


図 4 入試区分ごとの評定値と GPA との関係

しているが、今回の分析結果においては、音楽実技特別推薦、併設校制推薦を含む学校推薦型選抜での受験生には受験時評定値が高いことで大学入学後の成績も高くなることが望めるといえる。

それに対して、図 4 において、(d)前期入試、(e)後期入試では、相関係数がそれぞれ 0.215、0.234 で弱い相関しかない。つまり、一般選抜において受験時評定値の高低では入学後の成績は予測できないといえる。一般選抜で入学する学生は受験時に複数の大学や学部を併願した結果の入学であり、本研究の対象としている大学や音楽教員になることに必ずしも強い意欲を持ってはいない学生もみられる。音楽コースの学生の場合、音楽の実技科目の成績が GPA に大きく影響するが、実技科目では意欲の違いで学習への取り組みの違いが大きく、それが成績に影響する。その結果、一般選抜では評定値と GPA との相関が弱いと考えられる。

4 教員就職状況

4.1 就職状況全体

対象学部における音楽コースの学生の就職状況を、教員を中心に示す。ここでの就職状況は、卒業時に決まった進路先である⁷⁾。対象は、2007 年度入学者から 2017 年度入学者までの卒業生の計 190 名である。

まず、就職状況全体を表 1 に示す。小学校教員免許取得が必須であることと小学校より中高の採用倍率が高いことから、中高の教員免許取得者であっても教員就職はほとんど小学校である。その中で、一部は中学校音楽、また、わずかながら幼稚園・保育所への就職者もいる。なお、小学校音楽は小学校の音楽専科での採用を意味する。表 1 においては、公立の場合には正規採用か期限付き採用かを分けて記載している。ただし、期限付き採用の場合に常勤・非常勤は区別していない。私立は一括で別扱いをしている。それ以外は、大学院等への進学、一般企業、不明や就業しない者をそれぞれ、「進学」「企業」「他」としている。

また、表 1 に示した 190 名を入試区分ごとで図 5 に示す。公立・私立の区別や、正規・期限付きの区別はしていない。それぞれのグラフは区分ごとの割合を比較しやすくするため帯グラフとしている。グラフ内の数値はそれぞれの人数である。なお、入試区分ごとに加えて全体も示している。ただし、「その他」の入試区分のグラフは省略している。

図 5 より、教員就職率に着目すると、小学校教員就職率が一番高いのは前期入試であるが、他の区分とさほど違いがないことがわかる。その中で、音楽実技特別推薦だけは小学校教員就職率が突出して低く、逆に、

中学校音楽教員就職率が突出して高くなっている。このことは、音楽実技での入試による学生であることから妥当な結果といえる。一方、音楽実技特別推薦では企業への就職者も多い。これは、音楽が好きではあるが教員として音楽を教えることを選ばない者が多いからだと考えられる。ただし、音楽実技特別推薦は人数が少ないことから、上記のことを現時点では断定できない。今後継続して調査することで検証していく必要がある。

表1 就職状況

	公立		私立	合計
	正規	期限付		
小学校	79	33	5	117
小学校音楽	1	6		7
中学校音楽	4	5		9
幼稚園・保育所		1	4	5
進学	—	—	—	10
企業	—	—	—	32
他	—	—	—	10
合計	84	45	9	190

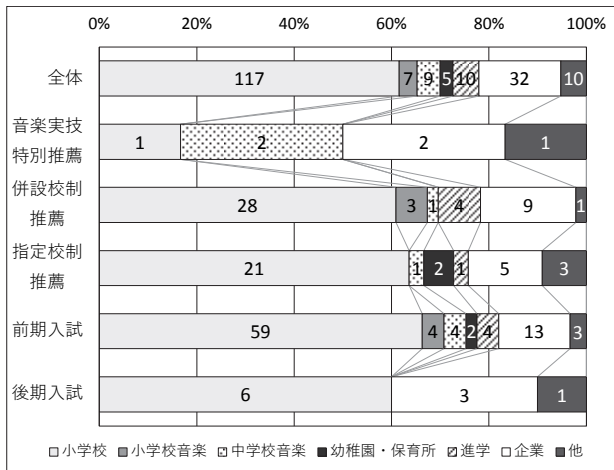


図5 入試区分ごとの就職状況

4.2 専任教員就職状況

図5で扱った教員就職者に対して、それぞれの専任教員の割合を入試区分ごとで図6に示す。この割合は、採用試験の合格率を示す。扱う校種・教科は、小学校、小学校音楽、中学校音楽としている。

図6より、音楽実技特別推薦は小学校、中学校音楽で他の入試区分に対して専任教員の割合が一番高い。

専任になれなかった者が期限付きになっていることが一般的なので、音楽実技特別推薦は教員採用試験の合格率が高いといえる。この入試での入学者に、単に音楽を学びたいためだけでなく、教員としての適性や意欲が高い者が多いことが推察される。また、前期入試で中学校音楽、小学校音楽の合格率が高いことがわかる。一般選抜での入学者は筆記試験での学習経験が豊富であることと、その中で音楽をも意欲的に学んできた者が合格していると考えられる。ただし、4.1節で述べたように、音楽実技特別推薦は現時点では人数が少なく断定するには至らないため、今後の継続的な調査が必要である。

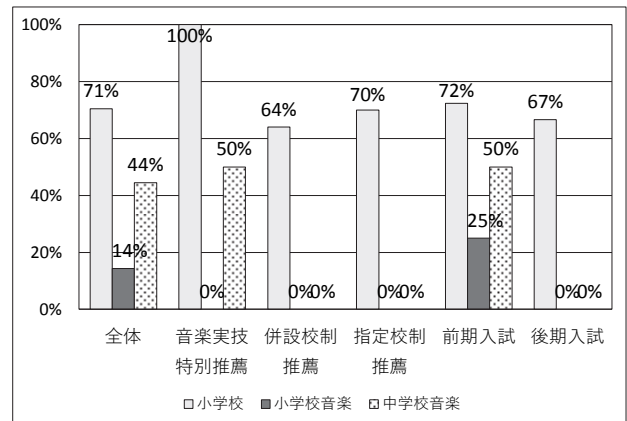


図6 入試区分ごとの専任教員就職の割合

次に、教員就職者を対象に、専任教員になった人数・割合を大学でのGPAで0.2ずつの刻みに分けて図7に示す。図7において、例えば、「3.6以下」は「3.4より高く3.6以下」を表す。ここでは、比較しやすくするために、グラフは割合の積み上げ棒グラフ

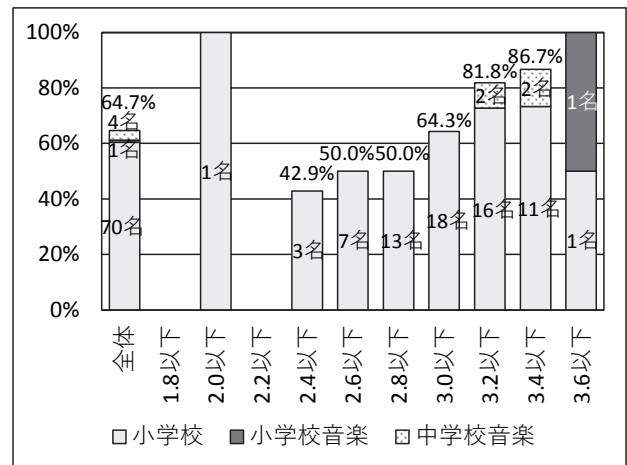


図7 GPAごとの専任教員就職の割合

で示している。小学校、小学校音楽、中学校音楽のそれぞれで人数を記載し、割合は校種で分けずに合わせて求めている。入試区分での区別はしていない。

1 名しかいない GPA2.0 以下を除いて、全体的に GPA が高くなるにつれて専任教員就職率が高くなっていることがわかる。中でも小学校音楽や中学校音楽に関しては GPA が高い学生しかいないといえる。

5 卒業生に調査する音楽免許取得の意義

対象学部における 2007 年度から 2016 年度入学者の音楽コースの卒業生 177 名に対して、「音楽免許を取得してよかったこと」を自由記述で求めた。その結果、回答が 73 名から得られた（回収率 41.2%）。得られた結果をテキストマイニングにより分析する。テキストマイニングには、KH Coder（樋口, 2020）を用いる。なお、73 名中で 3 名のみは「よかったことはなし」という趣旨の回答であった。

KH Coder によって階層的クラスタ分析を行った結果、7 つのクラスタに分けられた。各クラスタを KWIC コンコーダンスにより筆者らが要約すると次のようになった。

- ・児童生徒と音楽でつながる機会が持てる。
- ・大学で音免を取得できた。
- ・大学での学びを音楽の授業や学級経営で活かすことができる。
- ・ピアノが弾けるので学校行事での伴奏等で頼りにされる。
- ・音楽に関する多くの学校行事を任せてもらえる。
- ・働き方の選択肢が広がる。
- ・大学で音楽の専門性を高めたことで、自信を持って音楽の指導が行える。

これらから、小学校教員免許取得を主体とする学部の中で音楽免許を取得したことに対して、卒業生の多くが多様な観点でよかったことを感じていることがわかる。

6 まとめ

小学校教員養成を主体とする私立大学教育学部における音楽免許取得者の特徴を、人数、学力、教員就職状況等で調査・分析した。その結果、主に次のことがわかった。

- ・小学校教員養成を主体とする学部において音楽実技を要する入試区分を設定したことで、音楽免許取得が可能な学部としての認識が向上した可能性がある。
- ・学校推薦型選抜で入学する学生は、受験時の評定値

が高いと入学後の GPA も高い傾向にある。一方、一般選抜入学者の評定値と GPA との相関は弱い。

- ・音楽コースの学生であっても、小学校教員になることが多い。中でも一般選抜の前期入試で入学する学生の小学校教員就職率が高い。
- ・音楽教員になるのは音楽実技特別推薦入学者と大学での GPA が比較的高い学生に多い。ただし、音楽実技特別推薦は人数が少ないことから、現時点ではその可能性があるという段階であり、今後継続的な調査・検証が必要である。
- ・大学入学後の希望により音楽免許取得できる仕組みの学部において、本人の希望で音楽免許を取得した卒業生の多くが多様な観点で音楽免許を取得してよかったことを感じている。

今回は、音楽コース学生のみでの分析をしたが、同じ条件で入学している学部全体の学生との比較や、他大学の教育学部における音楽免許取得者との比較による特徴分析が今後の課題である。

注

- 1) 初等中等教育専修では、2 年次編入学定員 2 名と 3 年次編入学定員 3 名とがある。また、定員以外に他学部からの転学部、保育・初等教育専修からの転専修で入ってくる学生もいる。
- 2) 数学と音楽の他にも、一部の学生は他学部での履修により、例年若干名の中高国語、英語、社会等の免許取得者がいる。
- 3) 併設校制推薦入試は調査対象大学の併設高等学校からの推薦枠による入試である。
- 4) 2020 年度入試までは「センター利用入試 A」として実施していたが、2021 年度入試からは「大学入学共通テスト利用入試 A」としたような名称の変更や、入試区分ごとに募集人数の若干の変更がこれまでに何度か行われている。
- 5) 実際には、これまでに音楽実技特別推薦で入学した学生は全員入学時点で音楽コースを希望している。
- 6) 論文執筆時点において卒業していない在学生においては、その時点までにわかっている GPA を扱っている。
- 7) 卒業時に小学校教員であってもその後の異動で中学校音楽教員になっている者もいる。

参考文献

- 日下田岳史・福島真司 (2019). 「高校調査書の評定平均値は大学入学後の成績を予測できるのか—指定校推薦入試の事例分析—」『大学入試研究ジャーナル』 29, 61—66.
- 樋口耕一 (2020). 『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—第2版』ナカニシヤ出版.
- 平野光昭 (1993). 「国立大学の入試に関する常識と非常識」『名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科』 40, 4—14.

- 井上敏憲 (2014). 「AO・推薦入試に関する高等学校の指導と
高校教員の意識」『大学教育実践ジャーナル』愛媛大学教
育・学生支援機構, **12**, 73-78.
- 石井秀宗 (2012). 「推薦入試の経年分析—志願者の動向及び学
業成績の検討—」『大学入試研究ジャーナル』 **22**, 35-42.
- 石井秀宗 (2014). 「推薦及び一般入試の受験者層の推移に関す
る検討」『大学入試研究ジャーナル』 **24**, 35-40.
- 磯部二郎・佐藤典子・沖野成紀 (2010). 「音楽専門課程への進
学理由, 適応感, 卒業後の希望進路, およびこれらと性格との
関係について」『音楽教育学』 **40**(1), 1-13.
- 河合塾 (2021). 「入試難易予想ランキング表」 河合塾
<https://www.keinet.ne.jp/university/ranking/> (2021年8月10
日).
- 小松俊朗 (2011). 「入試・コースと学内成績の相関に見る教育
学科の動向」『教育諸学研究』神戸女子大学文学部教育学科,
25, 67-83.
- 文部科学省 (2021). 「中学校・高等学校教員（音楽）の教員の
免許資格を取得することができる大学」 文部科学省
[https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoin/daigaku/detai
/1287061.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoin/daigaku/detail/1287061.htm) (2021年8月10日).
- 竹内聖彦 (2019). 「私立大学教員養成学部における入試区分と
卒業後の進路との関連」『大学入試研究ジャーナル』 **29**, 23-
28.